

広報うちこ

# UCHIKO

2011.12.1

Vol.166

## CONTENTS 目次

- 2 特集 2万人のGuten Tag.  
まちの、わたしの国際交流
- 12 加戸病院 開院
- 14 まちのニュース  
山ブドウワインを知事へ贈呈/  
豊島区との交流事業/秋の小田  
深山さんの森の日 ほか
- 16 うちこ往来  
愛ロード、愛リバー・サポーター  
に感謝状/加古隆QUARTET/  
立川小児童ふるさとCMを制作/  
文化祭・農業祭巡り ほか
- 20 みんなのひろば  
リレーエッセイ/はじめてのパー  
スデー/人☆キラリ ほか
- 24 HELLO!!!
- 25 ゆうていあ Vol.128
- 26 議会だより 第48号
- 28 町からのお知らせ  
24年度保育園入所児童を募集  
/12月は税の滞納整理強化月  
間/年賀交換会/特別支援教育  
セミナー ほか
- 30 暮らしの情報  
町営住宅入居者募集/大きな榎  
の木の下で/「オーロラに駆ける  
サムライ」内子座公演/道路  
の積雪・凍結に注意 ほか
- 32 住人十色

## 特集

# 2万人のGuten Tag.

## まちの、わたしの国際交流

「Guten Tag.(ゲーテン・ターク)」は、ドイツ語で「こんにちは」。  
ドイツ・ローテンブルク市と友好関係を築いてきた内子町には、  
たくさんの「Guten Tag.」「こんにちは」の出会いがあります。  
あいさつは交流の第一歩。国を越えて、言葉を越えて、  
町中に笑顔の「こんにちは」があふれる、そんな素敵な町を目指して





# 交流の土壌を「耕」す

9月2日、内子町はドイツ・ローテンブルク市(正式名称ローテンブルク・オブ・デア・タウバー)と姉妹都市盟約を結びました。25年にわたって絆を深めてきた両市町。その歩みを通して、町に国際交流の土壌が育まれています。



ローテンブルク・オブ・デア・タウバー  
ドイツ連邦共和国バイエルン州アン  
スバッハ郡の大規模郡都市。面積  
41.45km<sup>2</sup>、人口約1万1000人。ロマ  
ンチック街道の中間点にあり、中世  
の姿を残す町並みに世界中から多数  
の観光客が訪れている

1\_内子座で開かれた内子シンポジウム(1986年) 2\_友好都市盟約を結ぶヘルベルト・ハッハテル市長と河内紘一町長(当時、2001年) 3\_姉妹都市盟約に調印し握手を交わすハルトル市長と稲本町長 4\_内の子広場での記念植樹 5\_内子座での調印式 ④フェアスター第2市長、⑤林博町議会議長 6\_市庁舎に掲げられた両国の国旗

町並み保存がきっかけに

内子町とローテンブルク市の交流の始まりは1986年。町並み保存とまちづくりをテーマに内子座で開催した「内子シンポジウム」に、中世の面影を残す美しい町並みの保全で有名な同市からオスカー・シューバルト市長(当時)を招いたことがきっかけでした。

以降、市長・町長や議員の相互訪問、青少年海外派遣、市民・町民訪問団のホームステイなどを通じ、25年にわたる交流が続いています。

## 内子町国際交流協会の発足

この交流の中で1994年、町に(財)内子町国際交流協会が発足します。財団法人としての設立は県内で3番目、町単位では初めてのことでした。

これは「町に国際交流活動の母

体となる協会をつくろう」という機運の高まりから、町民有志が中心となって実現させたもの。「国際交流がなぜ必要なのかを理解し、一人でも多くの人に参加してほしい」と、パンフレットを片手に一人一人に説明して歩き、およそ1700件・1億円余りの寄付を集めて基金としました。

こうした町民の熱意によって、今につながる町の国際交流の土壌が育まれてきたのです。

## 友好都市から姉妹都市へ

交流が始まってから15年後の2001年9月、内子町とローテンブルク市は友好都市盟約を結びました。それからさらに10年の交流を重ねた今年9月、その絆をより強めるために姉妹都市盟約を締結。9月2日に同市で、10月29日に内子町で、それぞれ盛大に調印式が行われ、ヴァルター・ハルトル市長、稲本隆壽町長をはじめ市民・町民など約200人が出席して姉妹都市の誕生を祝いました。

これまでの交流をさらに発展させ、永続的な関係を築いていくことを誓い合った両市町。内子町の国際交流は、また新たなステージへと歩みを進めます。

## プランナーとして国際交流を活発化

(財)内子町国際交流協会の活動は、ボランティアグループ「国際交流プランナー」が中心となって企画・運営しています。メンバーは職業も年齢もさまざまですが、協会設立時の思いを受け継ぎ、住民主導、官民一体となった国際交流の活発化を目指しています。活動を通して世界中の人と出会えることが、一番の喜び。外国に興味のある人は、ぜひ一緒に活動しましょう。



(財)内子町国際交流協会  
副理事・プランナー  
小野尚久さん(48)



プランナー会の様子

- 内子町・ローテンブルク市交流の系譜
- 1986◎内子シンポジウム'86開催
  - 1987◎町長、町民有志がロ市を訪問
  - 1988◎ハッハテル市長、シューバルト前市長来町
  - 1993◎町長、町議会議員友好公式訪問
  - 1994◎町職員1人を市庁に派遣、青年1人をハム・ソーセージ作りの技術研修に派遣
  - 1995◎町民有志使節団がロ市を訪問
  - ◎第1回青少年海外派遣(以降、毎年実施)
  - 1997◎ハッハテル市長、市民が来町
  - 1998◎町民海外派遣団がロ市を訪問
  - 2001◎ハッハテル市長、市民が来町
  - ◎町長、町議会議員友好公式訪問し、友好都市盟約を締結
  - 2002◎ロ市青少年一行が内子町を訪問
  - ◎ロ市青少年一行が内子町を訪問(2004年まで毎年)
  - 2004◎ハッハテル市長、市民、ロ市の姉妹都市であるフランス・アティスモン市民が来町
  - ◎ロ市にて「内子フェア」開催
  - 2007◎ロ市青少年一行が内子町を訪問
  - ◎ハルトル市長初来町
  - 2010◎ロ市青少年一行が内子町を訪問
  - ◎ハルトル市長再来町
  - 2011◎姉妹都市盟約締結



### これからもずっと、国際交流に関わり続けたい

第1回派遣生 名本裕子さん(33) 内子11

高校3年の時に派遣事業が始まり、弟に誘われて応募しました。そのころは特に海外に興味もなく、英語も大の苦手。ホストファミリーに言葉を掛けられても満足に伝えられず、別れの時も「サンキュー」としか言えない自分もどかしく、悔しい思いをしました。そして「絶対話せるようになろう」と決め、卒業後、働きながらお金を貯めて北アイルランドに留学しました。

その後、町の国際交流協会の職員として8年間勤務。自分を変える経験をさせてくれたことへの感謝と恩返しの気持ちを込めて、後輩の派遣生たちを送り出してきました。今年の春、子育てのために退職しましたが、今もプランナーとして活動に関わり続けています。私にとって国際交流は人生の一部。これからも一人の町民としてずっと交流を続けていきたいです。

### 海外派遣の経験が、夢を叶えるきっかけに

第3回派遣生 沖口冴美さん(28) 横浜市

私が派遣生として参加したのは中学3年の時です。英語が好きで、「学校で勉強している英語がどのくらい通じるのか試したい」という気持ちがありました。恥ずかしがりな性格もあり、なかなか上手に話すことができませんでしたが、私のつたない英語を温かく聞いてくれたホストファミリーの姿を今でも鮮明に覚えています。

この派遣をきっかけに、英語をもっと勉強して、もっとコミュニケーションをとれるようになりたいと思うようになりました。そして航空機の客室乗務員になりたいという夢への思いが強くなり、それを叶えることができました。その後の進路や人生にいい影響を受ける経験ができたことを、心から感謝しています。



### 国際的な舞台で活躍することが将来の目標

第15回派遣生 武岡志文くん(14) 立川中央

中学1年生の時に海外派遣に参加しました。学校で開かれた説明会を聞いて、「楽しそう」と興味を持ったことがきっかけです。

実際に行ってみて、日本とは全く違う風景や、ホストファミリーの温かさに感激しました。中でも同級生だったクリストファーさんと意気投合。翌年、ローテンブルク市からの訪問団の一員として僕の家にも泊まりに来てくれ、とてもうれしかったです。また、内子町のこともたくさん質問されて、もっと自分の町を知らないといけないなと実感しました。

全てがとても楽しい経験でした。自分の世界が広がり、将来は国際的な舞台で活躍したいという目標もできました。その目標に向かって頑張っていきたいです。



「第16回(平成22年度)青少年海外派遣事業」の派遣生たち

# 交流を通して 可能性を 「広」げる

ローテンブルク市との交流を通じ、毎年行っている青少年海外派遣事業。多くの若者がかけがえのない経験をj得て、力強く未来に向かって歩き出しています。

224人の青少年を派遣  
ローテンブルク市との関わりの中で、特に力を入れて取り組んできたのは、未来を担う青少年たちの交流です。

その中心となっているのが青少年海外派遣事業。「異国での体験を通して国際理解を深め、世界的な視野で物事を理解し、行動できる力を身に付ける」ことを目的に、協会設立の翌年から、毎年15人前後の中学生・高校生を同市に派遣しています。今年で第17回を数え、送り出した派遣生は224人になりました。

世界を知り、自分を見つめる派遣生は、ホームステイなどを通して日本とは異なる生活習慣や食事、文化などに触れるとともに、ホストファミリーをはじめ多くの市民と交流します。そして、「日本との違いに驚いた」「もっと内子のことを知らないといけない」と思った「言葉よりもコミュニケーションを取ろうとする気持ち」が大切なんだと気付いた「など、さまざまなことを学んで帰ってきます。

海外派遣事業に参加したことによって将来の夢が見えてきた、考え方や行動が変わったなど、大きな影響を受けたと語る派遣生たち。世界を知ることであらためて自分を見つめ直し、新たな気持ちで世の中と向き合う。国際交流は若者が自らの世界を広げ、未来への一歩を踏み出す大切なステップの一つなのです。

1\_ガイドの説明を聞きながら町並みを見学 2\_お菓子作りなども体験 3\_学校訪問では生徒と一緒に教室で授業に参加する





内子町では、長年にわたる地道な取り組みによって、町全体に国際交流の土壌が育まれてきました。そしてその土壌から、交流を生かした新たな活動の芽が育ち始めています。

**1** 1994年、町は一人の青年をハム・ソーセージ作りの研修のためローテンブルク市に派遣しました。高校を卒業したばかりの山口佳一さんです。

当時、料理人を目指していた山口さんは、実家が養豚業を営んでいたこともあり、その豚肉を使って加工品を作れないかと考えていました。そこで、交流のある同市で本場のハム・ソーセージ作りを学びたいと志願。町民海外派遣制度を利用し、市内の精肉店で3年半にわたり研修を行いました。

帰国後は(株)内子フレッシュパークからりに勤務。「内子にいなながら、いつでも誰でも気軽に本場ドイツの味を楽しめるようにしたい」と、製造・販売のほか、さまざまなイベントで屋台を出したり、

パーティーなどに出張して料理を提供したりと奮闘しています。そして、そんな山口さんのハム・ソーセージは、すでに町の名物の一つになっています。

**2** 姉妹都市提携を機に、「ものづくり」の分野でも新しい取り組みが始まりました。

木工や鍛冶、和紙など多業種の職人が集まって構成する「内子手しごとの会」は、今回の盟約締結の記念行事の一環として、同市内で初めての作品展示会を開催。ワークショップなども行い、ものづくりを通して日本の技術や文化を紹介しました。来場者にも好評で、メンバーは「いい刺激を受けた」と言います。

会では、すでに来年の開催も決定。山本勝美会長は「第一の目的は文化の交流。日本とは違う感性やものづくりの方法を知ることで、発想の飛躍につながる。双方の良いところを生かし、両市町の交流の象徴となるような作品を作りたい」と、意欲を燃やしています。

**3** 国際交流協会が開く外国語講座からは、受講生を中心としたボランティアグループが生まれました。

「せっかくなので勉強したことを少しでも役立てよう」と2005年に発足した内子町外国語ガイドの会。現在の会員は大学生2人を含む17人で、申し込みに応じて英語で町内を案内しています。

「遠く海外から来てくれた人たちに内子の良さを知ってもらいたい、訪れて良かったと思ってほしい」という気持ちで案内している」と話す中田和子会長。中には、仲良くなつてその後もメールのやり取りをしたり、相手の国を訪ねたりする人もいます。また以前に町内で案内を受けた人から聞いてガイドを申し込む人もいます。そうやって、国際交流の輪はさらなる広がりを見せています。

**4** 行政の現場にもローテンブルク市との交流は生かされています。

町は、職員自らがまちづくりに関して自主的に研究、研修活動を行うことを推進し、

支援制度を設けています。現在、環境政策室係長を務める多比良雅美さんは、制度を利用し2003年から1年間、同市に滞在してドイツの環境政策を学びました。

太陽光、風力、バイオマスなど新エネルギーへの取り組みが求められる中、「環境先進国であるドイツの取り組みを勉強することで、内子町ではどのように進めていけばいいのかを考えたいと思った」という多比良さん。実際に現場で学び、肌で感じることで「ビジョンが明確になった」と言います。そしてその成果が、現在のエコロジータウン内子のまちづくりに反映されています。

自分の力を試したい、新しいことに挑戦したいと思ったとき、これまでの国際交流を通して育まれてきたつながりが、世界へ飛び出す一つのきっかけを与えてくれます。そうして世界を知り、経験を自らの力にして、さまざまな分野で活躍している人たちによって、町にさらなる魅力が生まれています。

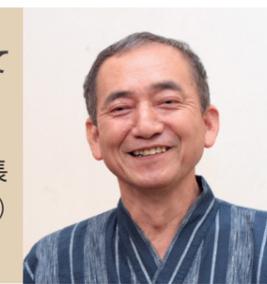
**4** 環境先進国での研修をエコロジータウン内子に  
内子町役場環境政策室係長 多比良雅美さん(40) 内子20



**3** 内子町に来て良かったと思ってもらえるお手伝いを  
内子町外国語ガイドの会会長 中田和子さん(54) 内子18第2



**2** 「ものづくり」を通して文化の交流を目指す  
内子手しごとの会会長 山本勝美さん(58) 内子19第1



**1** 本場のハム・ソーセージを内子町の食材で提供する  
内子フレッシュパークからり 山口佳一さん(35) 内子10



# 交流から新たな

# 「行」動をおこす

これまで育んできた土壌から、さまざまな取り組みが始まっています。

それぞれの良さを生かし、内子町に新しい魅力を生み出すために

# 一人一人の国際「幸」流

積極的に国際交流を楽しむ人々

内子町では、たくさんの人たちが、外国語講座の受講やホームステイの受け入れ、日本文化や郷土料理の紹介など、さまざまなカタチで国際交流を楽しんでいます。

ドイツの首都ベルリンの出身で、国際交流員として5年以上を内子町で暮らしてきたドレーン・アルントさん(35)は「日本人は、他の国の人々に比べて国際交流の意識がない人が多いと感じる」といいます。しかし内子町では、みんなが自然に、心を開いて受け入れてくれることに驚くそうです。

ローテンブルク市との関わりをはじめ、これまでに一歩一歩、着実に進めてきた歩みによって、町全体に少しずつ広がってきた国際交流の意識。自分たちとは異なる文化や考え方など、新しいことを発見する楽しさ。言葉が通じないからこそ一生懸命に伝えよう、理解しようとする努力し、通じ合ったときに感じる大きな喜び。そうして

言葉や国を超えて人と人がつながっていくことの幸せ。それらを感じるからこそ、多くの人が積極的に国際交流に関わっているのでしょう。

「Guten Tag」から始めよう  
「町の国際交流協会には、国際交流員の私と、二人の外国語指導助手がいます。小さな町に三人も国際交流関係の職員がいるのはめずらしいこと。子どもたちは幼稚園や保育園、学校などで普段から外国人の私たちと接し、自然に国際感覚を身に付けています。大人の皆さんも、ぜひ一歩を踏み出して」とドレーンさん。

国際交流の機会は、身近なところにも数多くあります。学校や職場、町並みや買い物に立ち寄ったお店にも……。気負わず気軽に、まずは「Guten Tag. (グーテン・ターク)」「こんにちは」のあいさつから、その一歩を踏み出してみませんか。そこからあなたの国際交流が始まります。

国際交流を通して感じる、人と人が分かれ合う喜びやつながる幸せ。一人一人の思いが積み重なって、いつか町中に、笑顔の「Guten Tag.」「こんにちは」があふれるように――。



## 私の国際交流

国際交流のカタチは人それぞれ。  
自分らしく生き生きと交流を楽しむ皆さんを紹介します。



のぶこ  
向井信子さん(71)  
松尾

### 英会話で出会いを楽しむ

町で英会話教室が開かれるようになった第1期からの受講生です。教室を通して、旅行に行ったりホームステイを受け入れたりする機会も多くあり、積極的に話しかけて出会いを楽しんでいます。



玉井ハヤ子さん(80)  
立石

### 自宅で「うどん打ち体験」交流

閉じこもっていたら進歩もないと、自宅で「うどん打ち体験」を開き、交流を楽しんでいます。言葉ができなくても一緒に作業していると通じ合えるようで、喜んでもらうたびに元気になります。



メラニア・ジュスフさん(33)  
内子19第1

### 自国とは異なる文化を体験

8月から外国語指導助手として内子町で勤務しています。一番驚いたのは、小さな町なのに、人々が心を開いて受け入れてくれること。これからもっとたくさんの日本の文化を経験したいです。



大塚生男さん(68)  
内子3

### 居合道が世界との架け橋に

内子フェアで居合の演武を行ったことがきっかけで、さまざまな国際交流活動に参加するようになりました。今までそういう機会がなかったので、世界に友人ができることに喜びを感じています



かずしげ  
石田一重さん(65)  
ゆみこ  
由美子さん(62)・明音ちゃん(4)  
内子22

### ホストファミリーで幸せ実感

国際交流協会のプランナーをしていたこともあり、これまでに7組のホストファミリーを務めました。毎回緊張しますが、喜んでもらったり心が通じ合ったりするととても幸せな気持ちになります。



樽岡唯さん(15)  
喜田村

### 今年の青少年海外派遣に参加

昨年の中学生英語弁論大会で優勝し、青少年海外派遣事業に応募しました。初めての海外で、自分の英語が通じるか不安はありますが、ホストファミリーといろいろなことを話してきたいと思います。